

ワークライフバランス時代の女性と生活文化

須賀由紀子

生活文化学科

Women's Quality Life on the Time of Work Life Balance

Yukiko SUGA

Department of Human Sciences and Arts

In the future, when the society will be valued on "Work Life Balance", which way of lifestyles will be ideal for the women? In order to think about this issue, at first the author focuses on the nature of women found from the ancient matriarchic society, by reviewing the works of J.J. Bachofen's *Mutterrecht* and Dr. Shinobu Origuchi's studies about ancient Japan.

Through these works, it was pointed out to seek for Love, Equality and Peace unconditionally were the natural sense of women, and also the religious power of them were so important for keeping the ancient life stable. Then the author indicates the life valued on such nature of women would be important for making the life humanize in future, by investigating some examples which might be regarded as embodying the nature of women in modern society.

The conclusion is that it will become more and more important for the women who will live in the post-industrial society to make the life harmonize the natural power of the women to the male's logical mode which has been important to develop the industrial society.

Key words : the nature of women 女性性, **Matriarchic Society** 母権制社会,
Work Life Balance ワークライフバランス, **Quality Life** 生活文化

1. はじめに

現在大学生として学び、これからの時代を背負っていく日本の若い女性たちは、どのような社会を生きることになるのだろうか。

大きな流れとしては、「人生 80 年時代」という生涯の持ち時間の中で、「ワークライフバランス」という言葉に込められているように、仕事も家庭も余暇も、バランスよく調和充実させて自己実現をはかっていくことが幸せとされる時代を生きることになる。社会活動における男女の性差は、建前上は捨象され、生きることにおいて、同じ人間として、男性も女性もなく、一人の人間として同等に認め合い、社会によって形作られてきた「男らしさ」「女らしさ」という枠組みを超えて、「自分らしく」「人間らしく」を追求する中から人生の道のりを築いていく。それは選択の自由が広がる時代でもあるが、同時に、「人間らしさ」の礎となる真善美の価値に根ざしたものの考え方をしっかりと持って、よりよき道を選び取っていくことが迫られ

る難しい時代でもある。

長い間、先輩の女性達が憧れ、希求し、闘い、ようやく開かれてきた「女性という性に関係なく自由な時代」の到来である。女性も男性同様、社会で伸びやかに活躍ができ、「自分が自分で選択する自分らしい人生」が歩めるように、と夢見られてきた時代が今目の前にある。この恵まれた時代を、どう「人間らしく」「自分らしく」生きるか。これからの時代を担う女性たち一人ひとりの暮らし方、価値観が問われる。まさに、新たな時代の生活文化の課題として考えるべき時である。

多様に開かれていく女性の生き方の選択肢の一つとして、従来の経済成長を支えた企業社会の中で、生産性、効率性の原理に従って、組織の歯車となって邁進し、自己実現をはかっていくという生き方が考えられる。しかし、そうした組織型の生き方がもたらす様々な弊害はすでに明らかであり、それを乗り越える生き方が今求められていると言ってもよいであろう。これからのワークライフバランスの時代に、「女性が男性

並み化して働く」ことは賢明な選択肢であろうか。むしろ、これからは、いのちの本質に根ざした女性が本来もつ特性を中心価値において、それを枯渇させないような生活の仕方を優先し、その中で仕事の内容や仕方も構想していくという生き方を考えるべき時なのではないだろうか。そのためには、「女性の自然性」の価値をあらためて見つけ、それを中心に置きながらライフスタイルを形作る姿勢が大切なのではないか。

本稿はこのような問題意識から、「女性の自然性」について問い直し、その自然性を活かす暮らしの価値を見つめ、「ワークライフバランス」と言われる時代の中で、男性型組織社会の生き方ではなく、生きることの価値に迫る「生活の充実」に軸足を置いたこれからの女性の生き方を考える一助とする。その方法として、「神話の時代の女性像」¹⁾をレビューし、女性が本能的に有すると考えられるものを抽出する。次に、その力を「女性の自然性」とおいてみたときに、それが発揮される女性の生き方としてどのような姿が考えられるか、我々の身近な時代に生きた女性の中から事例を取り上げる。そして、それらの生き方の底流に、現代社会のひずみを乗り越える力としてどのような点が見いだされるのかを検討し、これからの時代における「女性の自然性を活かした暮らし」の意義について指摘する。

2. 「女性の自然性」の検討

1) 母権理論からみた「母権制社会」の本質

「女性の自然性」を考えるためには、スイス・バーゼルの法学者、バハオーフェンによって明らかにされた「母権制社会」の本質に学ぶことが一つの手だてである²⁾。バハオーフェンは、膨大な量のローマ、ギリシア、エジプトの神話や象徴に関する資料や遺品を詳細に調査し、そこに残された記録を詳細にたどるうちに、われわれの文明社会とは違う価値観を持った社会の姿を発見した³⁾。それは、「文明世界の歴史全体にわたって典型的に見られる父権的社会構造は比較的最近の時代に属するのであり、それに先行して、母親が家族の長となり、社会の指導者を引き受け、偉大なる女神とされていた文化が存在していたという認識」⁴⁾であった。

この仕事におけるバハオーフェンの業績は大きく次の二点である。

第一に、母性的愛と父性的愛の本質を示し、そこから生ずる母親ないし父親との絆の相異から社会のあり方を示し、個人心理と社会心理との関わりへの道を開いたことである⁵⁾。母性的なるものの本質とは、「他者に対する愛、養育、責任意識」である。「胎児を宿すことによって、女性は、男性よりも早く、自我を越えて他者を慈しみ愛し、全身全霊を捧げて、他者を守り養育することを学んでいる」⁶⁾。この母性的愛は分け隔てなく注がれる。従って、「あらゆる愛とあらゆる利他主義が生まれるもととなる種子」であり、その結果、人間を等しく包む同胞愛、すなわち「普遍的人間主義」を生み出す⁷⁾。「あらゆる文明の向上も、生活におけるあらゆる善行も、献身も、養育も、死者の哀悼も、すべて女性に始まる」のである⁸⁾。このように、母性的原理に基づく社会とは「愛と協調と平和」を中心価値に置く社会であり、その結果、「平等、普遍性、生活の無条件的肯定の感覚」がその肯定的な特徴になる。反面、非理性的であり、合理性や進歩性に欠ける。

一方の父性的愛は、母親のような直接的なものではなく、理性や道徳を介するものである。父と子の絆をつなぐのは、無条件の愛ではなく理性優位の道徳であり、父は最愛の息子一人に家督を譲ることを考える。そのため、父性社会は平等から階層社会へ、調和は不和へと席をゆずる。従って、父性的原理とは、「法律、秩序、理性、ヒエラルキーによって規定されて」おり、父権制社会においては「理性、法、科学、文明、精神的発達に即した原則的な方向づけ」が優位となる⁹⁾。反面、女性原理の社会にはなかった「ヒエラルキー、抑圧、不平等、非人間性」がそのマイナス面として指摘される。

バハオーフェンのもう一つの業績は、大きな歴史図式を示したことである。すなわち、「愛と協調と平和」¹⁰⁾を主原理とする母権制社会の成立は、それ以前の、まさに歴史の原初において存在したと想定される、「野生のままに繁殖した沼沢植物」¹¹⁾に比せられるような原始的な動物的生活を、人間的生活の初段階である文明的・社会的生活へと引き上げることに寄与した。しかし、それは、国体よりも身内の死の追悼を優先したアンチゴネーがその象徴であるように、組織や社会の存続より「目の前の命への愛」へと非理性的に向かうものであり、合理性に欠けていた。そうした社会に理性的に秩序をもたらし、法を優先させて社会を機能

的に働かせ、その後の人類社会を今日のような文明的なものへと発展させたのが、父権制社会の出現であった。人間社会はこのように、全く粗野な動物的段階から母権制社会へ、そして、父権制社会へと進化してきた。母権制社会よりもより進んだ段階と捉えられる合理的な父権制社会は、しかし、「自由と平等から、ヒエラルキーと不平等へと至る歴史」でもあった¹²⁾。そのため、この後社会は、「母権制原理をも父権制原理をも止揚した水準において、愛と平等へと還帰してゆく」ことを予知しているのである¹³⁾。「母権制原理をも父権制原理をも止揚した水準」とは、「高次の発展水準」であり、それは、「母親との絆が、身体性をもった実母への固着としてではなく、高次の精神的水準に立つ愛と平等の原理への還帰として復元される」とする¹⁴⁾。

このパハオーフェンの予知に、われわれは現代社会の様々なひずみを解決する方向性を見出すことができるように思われるのである。なぜならば、現代社会が抱えている格差や貧困の問題、一神教の深刻な宗教対立、「戦争の世紀」と言われる 20 世紀の戦争における大量殺戮、地球環境破壊などは、理性優位の父権制社会のもたらしてきた負の部分であり、その平和的解決に働くのは、母権制原理と父権制原理が融合して、「高次の精神的水準」であるところの愛と平等を価値とする社会を実現していくことに依ると考えられるからである。その意味で、父権制優位社会の中で、いかに母権制の原理を高次の精神性のレベルで働かせていくかということが、大切になってくるのではないだろうか。

ところで、パハオーフェンによって明らかにされた母権中心社会において働いていた「女性の自然性」とは何か。それは、一言で、「女性の宗教力」であった。「女性による予言は男性による予言よりも古く、信仰においては不動」¹⁵⁾であり、祭祀の領域や祭儀を忠実に守ることに力を発揮した。祭祀を中心に生活は恒常的にまわり、社会は統治された。その中心的役割を担うのは女性であった。「女性は崇高な原理の担い手として、神の定めを啓示するものとして、支配し君臨する」「いかなる粗暴な激情を鎮め、戦いの矛を収めさせ、啓示と正義を語る自らの言葉を不可侵のものとし、何にもまして自らの意思こそ最高の原理として尊重させる、あの魔術にも似た女性の力が根ざしている」¹⁶⁾のである。この女性の宗教力をもって、「無法ともいべき

最古の野蛮な生活」は、「柔和で穏和な文明の道」へと開かれ¹⁷⁾、「紀律ある生活文化がもたらされた」のであった¹⁸⁾。

女性優位の根源にあったのは、「ものを生み出す力」であった。ここに古代の人々は大きな関心を持った。新月から満月そして旧月へと、かならず繰り返す月の姿の変化に、古代人は死と再生の神秘を感じ取り、それを女性の生み出す力に重ね合わせ、女性は月母神の代理人となった¹⁹⁾。穀粒がひとたび死ぬことによってまた新たな命を再生する姿に、「死は高次のものを再生するための不可欠の条件」と考えられ、死を迎え、襦ぎをして、次の新しい命を祝福する祭儀が女性支配のもと遂行された²⁰⁾。「地上の母は、大地原母の代理人であると同時に巫女であり、女性導師として、その密儀の執行を託され」たのであった²¹⁾。また、今日、人間の理性の象徴とされるロゴスも、その源をたどると、本来女性が有していた「ものを育む」能力をさす言葉であり、その力を借りて、男性の理性も精神活動も行いうると考えられたという²²⁾。そのあらわれこそが「両性具有神」であり²³⁾、また、プラトンの有名な説話「ソクラテスは、ディオティマの足下にひれ伏し、靈感に打たれた彼女に神秘的啓示の飛翔をかうじて理解し、彼女の教えが自分にはなくてはならぬと告白してはばからない」²⁴⁾という話の根底に流れているものに通ずる。

以上、パハオーフェンの母権論に基づき古代の女性の力を総括すると、女性は自然界の法則に従って高い宗教力を持ち、肉体的創造・文明的創造をになう。創造(再生)のエネルギーは絶大であり、その裏返しとしての激しい破壊力も女性は併せ持つ。しかしながら、生み出したものに対する愛は「無条件の愛」であり、平等で従って博愛的であり、女性原理とは「愛・平等・博愛の原理」となる。女性は、血および土との絆が強く、その愛は抽象的観念的なことよりも、目の前の具体的な肉体をとった個々の命に注がれ、生活を恒常的に安定させることを歡ぶ。父性的原理が「条件付きの愛、ヒエラルキー的構造、抽象的思考、人間の制定した掟(法律)、国家、正義等である」²⁵⁾ことと、対比されるのである。

2) 日本の神話の中の「女性の自然性」

日本の古代社会の中では、女性はどうのような力を持

つものと捉えられていたのであろうか。ここでは、日本人の根源にあったものを追求め続けた折口信夫の古代研究で指摘された「女の力」を概観する。

日本人の根生いの心が色濃く記されている古事記の国生みの物語の冒頭、いざなみの神といざなぎの神が歌いかけをして和合したという場面で、先に女神が誘いかけたところまきいかず、男神からの誘いかけにやり直しをして、今度はうまくいって島々が生まれた、と物語られる。ここには、女権主導社会から男権主導社会へと移行していく姿が見られるという²⁶⁾。遠い昔には、女性が男性に比べて大切な宗教力を持っていたと考えられる。その残照はいかなるものであろうか。

まずは、「妣なる国」という言葉がある。いざなぎ・いざなみの国生みの折、様々な子をなした後、最後に火の神を産んだいざなみは命を落としてしまう。最愛の妻を亡くして嘆き悲しむいざなぎは、黄泉の国まで妻を追いかけてこの世へと戻ってくれるよう掛け合うが、「姿をご覧なさいますな」という妻との約束を守れず黄泉の国で蛇神となった妻の姿を見てしまい、這々の体でこの世へと戻る。黄泉国平坂をこの世へと戻るいざなぎに、いざなみは恐ろしい呪いの言葉をかけ、魂が熟し切っていない男神の軽率な行動をなじるのである。それは、黄泉の国の支配者となり、人の命の生殺与奪の権を持ったいざなみの、大地母神的なたくましきである²⁷⁾。

この物語に続く「すさのを」の条の初めに、「妣が国」という言葉が出る。いざなぎの鼻の水から生まれた「すさのを」は、母のいる「根の堅州国」を思って、「青山を枯山（からやま）なすまで慕い嘆く」のである。また、「妣が国」という語は、熊野の海で難船に遭い、妣が国へ行くといって海に入った「いなひ（稲飯）の命」との身の上に絡んでも伝わっている。この場合の「妣」とは、海祇（わたつみ）の娘たまより姫をさす²⁸⁾。つまり、「妣が国」は、「われわれの祖たちの恋慕した魂のふるさと」なのであった²⁹⁾。

そこにもう一つ重なったのが「他界」という意識であった。古代の邑落の生活を恵み豊かにするためには、自然界の魍魎魍魎の精霊を鎮めることが必要であった。そのような大いなる力を持つものとは遠所にいる霊的なものであり、そこに庇護を求めるようになる。その遠い他界は、「祖先の霊の屯集する地」であり、それを古代人は「常世国」と呼んだ。そこから、時を

定めて、子孫の国土を訪れ、災いを退け、恵みをもたらしてくれる霊的なものがある（まればと）と考えられるようになった。それは、恐ろしい力をもたらすが、一方、その力の大きさ故に、恵みの力ももたらしてくれる。そうした力のため置かれる「常世国」は、絶対の暗闇の国の「常夜国」³⁰⁾でもあり、また、死滅のない「常寿国」とも考えられた。「闇かき昏（くら）す恐ろしい神の国」の精霊は、恐ろしいだけに、もてなしをすれば、恵みも大きい。そこから、「常夜の国」「常寿の国」という考えが生まれた。常世国の内容は、次第に展開して、後代には、永遠の富みの国という意義に固定した。そして、我が国は海に囲まれているところから、遠い水平の海のかなたに祖先の霊達の宿る「常世国」があることがイメージされたが、垂直的な海底の「わたつみの国」も「常世国」の場所であった。同時に、いざなみの神のやどる地下の国もまた「常世国」なのであった³¹⁾。

以上のように、古代人が自分たちの魂の故郷として憧憬した「妣の国」、そしてそこに重なる「常世国」が持つ印象は、古代人がものを産みなす「母なるもの」に感じとった破壊力と創造力の大きさへの信頼を想起させる。

第二に、「いろごのみの女」である。「いろごのみ」とは、「好色」という漢語の言葉と重なり合って、邪淫、軽薄な響きが想起されるが、本来「いろごのみ」は過去の日本人がその生活の理想の実現のために大切と考えた美德であった。すなわち、古代人は、数多くの気位の高い女性を妻としうる心広い男性こそ力があると考え、そうした「もろむき心」を持った貴人が国を治めることが、ゆるぎない安定した幸福な暮らしを保証するものと考えた³²⁾。いろごのみは、「万葉びとの理想とした最も高貴な神格・人格の特性を表わす語」なのであった³³⁾。

ところで、このようないろごのみの男には、「いろごのみの女」といえるような、女性としての知力、霊力を持ち合わせた、高貴なる心を持った女性の存在が欠かせないのであった。「いろごのみの女」は「ひたむき心」と呼ばれるような、激しく純粋な愛や怒りの心情を持ち合わせている。それは、まっすぐな愛であるがゆえに、その裏返しは激しい。その激しさを和らげるのは、歌の言葉の力であり、そうした歌を歌いかけることのできる男の側の細やかさ、寛大さが

求められたのである。女の深い情念に誠実に答えようとするうちに、男の側が立派になっていく。すなわち、男を立派にしていくには、太く激しくまっすぐな心をもって曲がったことを許さない、しかし、心やわらぐ時にはやさしさやおやかさを見せる女の側の心の高さが必要なのであった³⁴⁾。

第三に、祭祀を司るのは女性という伝統である。古代日本においても、「神の声」を聞くことができるのは、女性であった。巫女である聖なる女性は、祭祀において「神の妻」「一夜妻」となって神に仕え、「神の力を共同体にみちびく通路となる」。すなわち「共同体に属する巫女が神がかりを通じて不可視の神霊と接触交流し、託宣というかたちで神の意志を共同体に伝達する」³⁵⁾。聖なる女性は、「神そのものと見なされる神の代理者・代弁者」となるのである。それは、農村において、「田の神」を迎える時も同じであった。神を迎える聖なる女性は物忌みをして神を迎え、秋の実りを予祝する。

さらに、女性には、水の精霊の姿が重なりあう。いざなみの神の地底での姿は蛇体の雷神、とよたまひめが産屋に入って子を産みなすときの姿も蛇の姿であった。蛇は水の精霊の姿であるという³⁶⁾。古代人は、神聖な水が年に一度生命力の源泉である他界から寄せてきて蘇りをもたらすと信じ、蛇や蝶のように一定期間「もの」の中にもこもって物忌みの生活をして、そして、神聖な水を浴びて生まれ変わることを願うようになった³⁷⁾。

この生まれ変わりを司るのは女性であり、その結果、「禊ぎ」に霊力を発揮する「水の女」のイメージが生まれた。聖水を管掌するのは女性なのである。

古典には、水の神や水辺と関係の深い女性たちの印象がある。

たとえば、「みぬま」「みつは」は、みそぎの聖地に居て、聖水によるみそぎを施して、神または貴人の若子に靈魂を付け、その資格を完成せしめる水の神であった³⁸⁾。「にふの女神」は、山中の聖水のほとりに居て、神または鬼神を迎えて、水中から潜き出てみそぎを施す神女であった³⁹⁾。その「にふの女神」の信仰は、貴人の御子の誕生に関わる部民であった「みぶ」(壬生・乳部・入部)とも重なる。「壬生部の中心には産湯の儀礼の最も神秘的な部分に関与する女性」⁴⁰⁾があった。たとえば、湯と関係して御子を養育する女を「湯坐(ゆ

え)」という。折口によれば「ゆ」とは元来、常世の国から寄せてくる神聖な呪力ある水を意味する「ゆかはみづ」の約った語であり、「ゆえ」は産湯の儀式において、呪力ある水の中に御子を入れ据え、その水に潜って御子を取り上げる水の神女役を表す名称であった⁴¹⁾。古来、「神の嫁」となる聖なる女性があり、その女性は、聖なる水の中で、御子の靈魂を結び固めた呪具であるところの「みづのひも」を解きほぐし、新たな靈魂をいわいこめて、また結び固める役割をになった。それが、「天皇の一代に一度行われる大嘗祭の最古の形式」であったという。中国の星祭りや融合した七夕も、もともとは「棚機津女(たなばたつめ)」が、水辺の一段高い棚や棧敷のような場所で聖なる神のための機を織って、その来訪を待ち受ける「神の妻」の伝承なのであった⁴²⁾。

聖なる水と関わる聖なる女性の役割は、枯渇した魂にエネルギーを与えて復活させ、天子が治めるその国に、より大きな繁栄と豊穡をもたらすことにあった。この世の繁栄に関わる復活・再生に力を与えるのはやはり女性なのであった。

以上、日本の神話や伝承の中にみる「女性の自然性」もまた、新しい命や枯渇した魂の復活に関わる高い宗教力の根源に関わる。そして、創造のエネルギーの大きさゆえに恐ろしい情念の深さも持ち合わせる。

高い宗教力、それを導く体内に宿す自然=宇宙のリズム、新しい命の創出や枯渇した魂の復活に関わる女性の力、その裏返しとしての破壊力、目の前の命への愛など、古代人が感じ取ってきた女性力には、ある共通項を見いだすことができる。

では、これらの特性を「女性の自然性」とおいてみると、「女性の自然性を活かしたライフスタイル」として、どのような暮らし方が描き出せるのだろうか。次節では、その試みとして、我々の時代に身近な近現代に生きた女性の姿の中から、3つのパターンで捉えてみたい。

3. 「女性の自然性」を活かすライフスタイル像

1) 大母性の化身・岡本かの子

岡本かの子は、歌人、作家であり、芸術家・岡本太郎の生母である。1889(明治22)年、大地主・大貴家の第三子・長女として出生。「地主の箱入り娘」で、生まれつき腺病質であったかの子は、多摩川を中心と

する美しい武蔵野の自然に抱かれて生い育つ。徹底した早教育を受け、8歳頃から作歌を始め、入学した跡見女学校では、個性を伸ばす教育に歌の天分を發揮。兄雪之助（晶川）と交友のあった谷崎潤一郎らと親しくなり、文芸雑誌への投稿を始める。「新詩社」で与謝野鉄幹と出会い、多感な時期に、明治30年代のロマンチズムの薫陶を受ける。そして、美大生岡本一平と出会う。「彼女の帯びているなんとしても癒しがたいと思われる憂愁寂寞の感じ」に一平は惚れ込み、美しいものが好きなかの子も一平の美青年ぶりに心奪われ結婚するが、その結婚生活はそれほど幸せといえるものではなかった。舞台芸術などの仕事を細々と手がけていた一平が、夏目漱石の挿絵担当がきっかけで朝日新聞社員になって収入が増大するにつれ、もともと派手好きの一平は外で遊び歩くようになり、夫婦の危機に陥る。しかも、心の頼みであった兄が急死して失意の中、かの子は処女歌集『かろきねたみ』を刊行する。その後も、母愛子の死を迎えたり、夫婦の危機が深刻なものとなったり、出生した子どもを亡くしたりと次々に不幸が襲い、かの子は神経衰弱のため入院。この頃、早稲田の文科生・堀切重夫と恋愛。夫との間に三角関係。その後、夫婦で仏教にすがる。第二歌集『愛のなやみ』刊行（29歳）。この頃には、恒松源吉・安夫兄弟が同居。さらには、慶応病院の新田亀三を知り、恋に陥る。1924年（35歳）、中央公論に「さくら百首」掲載。1924年（36歳）第三歌集『浴身』刊行。仏教研究者としても活躍を始める。1930年（41歳）、一平、太郎、恒松、新田含む、一家を挙げて渡欧し、パリ、ロンドン、ベルリン、ウィーン、サンフランシスコなどへ外遊する。帰国後、1935年（46歳）、小説「鶴は病みき」を『文学界』に発表。その後、「母子叙情」「金魚繚乱」「東海道五十三次」「老妓抄」など、代表作を次々に発表し、1939年（50歳）に逝去した⁴³⁾。

複数の男性と同時に恋愛関係を持ち、全く自由奔放な生き方であった。しかし、その中で彼女は、後世に残る文学作品を残し、芸術家の息子を世に送り出したのであった。

外面的にはグロテスクでふしだら、わがままなかの子に、社会的にも人並みすぐれて有能な男達——一人は、恒松安夫。終戦後島根県知事を2期勤めた人物である。もう一人は、新田亀三。戦後、病院経営、農村組合会長、町長などを歴任し、社会的に活躍をした——が惚れ込

み、「かの子との生活」を「輝かしく真実な人生」「かの子と暮らしたあの頃だけは、本当に、人生に命がけて真剣な生活をした」となつかしがる⁴⁴⁾。果たして、どんな不思議な魅力がそこにあったのだろうか。

それは、「無類の純情と底抜けの無邪気さ」⁴⁵⁾「計算もなにもない、物事へのひたむきさ」⁴⁶⁾「まるで（姿を変幻させながら、羽をひろげて宙に舞い上がる）昆虫のような生命力の妖気」⁴⁷⁾といった言葉に代表される。後に独自の画風と自由奔放な表現で一時代を作った岡本太郎も、母を「純粋と情熱のかたまり」「あれほど純粋に“いのち”いっぱい生ききった人間をほかに知らない」⁴⁸⁾と評する。「世俗的という賢い女、女らしい女とは、およそ縁の遠い、猛烈な女性。生きている間は、私生活においても公の面でも八方破れ。いろいろと批判され、嘲笑され、誤解されとおして死んだ女」⁴⁹⁾、しかし、「純粋ないのち、それを総身に花ひらかせた人間」⁵⁰⁾であるかの子は、太郎にとって「母は宇宙を支配する、大きな叡智を持つ先導者」⁵¹⁾なのであった。それは、『『いわゆるの意味の母性』ではまったくない』という⁵²⁾。童女の純真さと、底深く、熟し切った側面とを併せ持つ、「古代の巫女を思わせる」⁵³⁾ものであり、そのスケールの大きさこそ、太郎が母を心底尊敬し、一平をかの子への献身に駆り立てる「大母性」であった⁵⁴⁾。太郎は言う。「父は逆に、母の大母性によって包まれ、生きがいを見いだして、ついにあのように大きな仕事をなしえたともいえる」「相互の深い信頼と理解によって、まったく異質の芸術家同士として支え合い、高めあう独特の共同生活を完成した」⁵⁵⁾。

このようなかの子の生き方に認められるのは、あくまでも純粋で純情と愛、ひたむきさである。賢夫人型の母性ではなく、間違ったもの醜いものに対しては頑として立ち向かい破壊してしまうような力と、そのエネルギーの大きさゆえに大なるものを生み出す創造の力に満ちた大地母性である。それが、彼女を取り巻く男性の魂を育み、夫婦がお互いを高めあい、息子の魂を育てたのであった。

このかの子の生き様には、古代の聖なる女性が有していた「いろごのみ」の力を感じさせるものがある。「いろごのみの女」の「ひたむき心」に打ち勝つためには、男性の側が「もろむき心」で女性に接していかなければいけない。それは、大きなエネルギーを必要とする。

しかしその結果、男性の側の心が太くなり、大きなより優れた仕事をなし得ると考えた古代の思想である。男性社会の中に女性があわせるのではなく、また、女性らしさにまわりつく「いわゆるの母性」への回帰でもなく、原初的な女性の生命力を発露させる生き方は、「女性の自然性に根ざす生き方」の一つのモデルではないか。虚飾のない本質的な生き方を求め、それをかたくなに大切に周囲を変えていく、というありようである。ただし、ここで大切なのは、その求めるものが、本質的な真善美の価値を求めるものであるがゆえ、周囲の者の気持ちをひき、立派に変革し、幸せにしえたという点である。

まっすぐに本質に沿って生き、理知的な小手先の取り繕いで軽々しく生きようという生の内にある虚なるものを見抜き、それを破壊せしめ、真剣な生へと向かわせる。かの子自身は、その創造のエネルギー、すなわち「わたし」自身の正直な心の発露は、和歌と小説という文芸の形の中に爆発させたのであった。現代の道徳観からは理解しがたい一風変わった私生活の中、本物を求める自らの美意識に基づき、文芸・芸術の世界で自己を表現するというところにそのエネルギーが向けられた。われわれもまた、それぞれの持てる能力で自らの価値観を高め、芸術の世界で、あるいは、社会活動にもこの精神を生かしていくことが望まれるのではないか。

2) 無心の愛の奉仕に生きた澤田美喜

澤田美喜は、日本のマザー・テレサとも言われる人で、太平洋戦争後、米兵と日本人女性との間で生まれ捨てられた混血孤児のための施設「エリザベス・サンダース・ホーム」、および併設の聖ステパノ学園の設立者である。三菱財閥の創始者である岩崎弥太郎の孫であり、夫は外交官の澤田廉三、4児の母である。

澤田のこの仕事の潜在的なきっかけとなったのは、ロンドン在住の1931(昭和6)年、孤児院ドクター・バナードス・ホームを訪問し、収容児たちの明るさ、清潔さ、そしてホームの中に小中高校を併設して子ども達を立派に自立させるその施設の姿に深く感銘を受けたことにある。「いらぬといわれる子どもを、みんなが引っ張りだこにするような有用な人間に仕上げるのは、すばらしい魔法です」(園長バナード博士)の言葉に心を打たれ、華やかな生活よりも、ボラン

ティア活動を通じて人を幸福にする喜びを求めたいという気持ちを強くする⁵⁶⁾。

彼女の思いが具体的な形をなしたのは、戦後すぐの「混血児・第一号誕生」のニュースである⁵⁷⁾。さらに直接的なきっかけとなったのは、ある時たまたま乗車した電車の中で、網棚から彼女の膝に落ちてきた風呂敷包みの中に混血の嬰兒がおり、その子の母親に間違われて疑われた事件に遭遇したことであった。「もし、おまえが、たとえいつときでもこの子の母とされたのなら、なぜ日本国中の、こうした子どもたちのために、その母になってやれないのか・・・」という啓示を受け⁵⁸⁾、こうした子どもたちを育て上げる施設を運営する事業に着手した。戦後の財閥解体で資金はない。だが、「一生に一度捨てられた子どもたちを、どうして再び捨てることができましょう」⁵⁹⁾という思いで、資金集めに東奔西走した。お金だけではない。理解のない中傷(「財閥生活をつづけたいために、大磯の別荘を確保したのさ」「財閥娘の一時の道楽さ」「どうせ生きていても苦しむのだから、いっそ小さいときにそのままにして死なせた方が慈悲というものだ」等)や、せつかく育てた孤児が犯罪者となってしまうといった試練を乗り越えて、「信仰半分、意地半分」⁶⁰⁾とやりぬき、美喜存命中の32年間、混血児2,000人を育てあげ、数多くの国際養子縁組を自らの手で行ったのであった。

澤田美喜の仕事は、バナードス・ホーム訪問時に動機づけられた。その時の「夢」「理想」と家族の励ましを支えに、「神さまの一使用人」となって神の愛を信じて仕事の困難を乗り越えていく。彼女は、ただ施しをするのではない。食べ物を与え、安全を保証し、教育を施し、社会へと送り出す。組織や責任論などといったことを超えて、「目の前のいのち」を無条件に愛する。中傷、無理解、育てた子どもの裏切り、資金難など、次々に振りかかる困難を超えて進む彼女の姿には、「目の前のいのちを見捨てるわけにはいかない」「子どもはナマモノ。今一刻をおろそかにすることはできない」という女性の愛の力、枯渇した魂を復活させる再生の力、そして「一度始めた仕事はやり遂げる」という情念の深さ、そして、あのバハオーフェンが示した「愛・平等・博愛」の女性原理を見ることができる。

彼女の仕事は、決して感傷的なものだけでは遂行できない。人間としてこの世に生まれてきた子どもの命

を預かり、独り立ちできるよう育て上げる、その営みは、表面的な感傷の領域ではなく、このような対象を欲求せざるをえないというやむにやまれない思いであった。その結果、あらゆる困難をはねのける無限の力が、その究極の「善」に向けて発揮され、凡人の想像に及ばぬ力と仕事をやり遂げる責任感が引き出されていった。

このことは、これからの人間らしい暮らしとの関わりで期待されるボランティア活動のあるべき姿を考えさせられる。一般にボランティア活動は「無償の活動」を意味し、助けを必要としている人のもとに、より力のある者が出かけて行って、何らかの施しをする活動といえる。その表面的な部分に、人は感傷的に惹きつけられることがある。一時的な正義感であったり、余暇の利用程度に軽く考えて足を踏み入れるケースも少なくない。しかし、究極の「善なるもの」に対する憧憬、使命感が強くなければ、それはその場限りのものとなったり、無責任なものとなったりする。功利性や経済性・合理性などを越え、人間的なつながりを求めて、人道主義に基づくボランティア活動や営利を目的としないNPO活動に対する関心も強い時代である。それを責任もって遂行する力の原点は、ここに見た「女性の自然性」にあるのではないか。

3) 自然の時間に寄り添う暮らし

もう一人、現代において考えてみたい女性のモデルがある。それは、ターシャ・テューダという、アメリカの絵本作家の人生である。ベストセラーの絵本作家として活躍をした彼女は、終生田園生活を好み、人生後半は広大な土地を入手して、「世界一の庭」と称され世界中の人々から憧れの的となるガーデニングを行った。

ターシャは、ヨットの設計技師を父に、肖像画家を母に、1915年ボストンに生まれた。9歳の時に両親は離婚。預け先の家の自由な気風に大いに影響を受け、学校の勉強はそっちのけで絵や図案ばかり描いていたという。15歳には学校通いをやめ、小さな子どもを預かったり、農場で自給自足的に食糧を得たりして暮らす。19歳で絵本を描き始め、23歳の時、処女作『パンプキン・ムーンシャイン』を出版。結婚後、住まいをニューハンプシャーの田舎に移し、4人の子どもに恵まれる。家庭生活を第一としながら、絵本の仕事、

農家の仕事、家事、育児を行う。忙しい中にも時間を見つけて、洋服や人形やおもちゃを作って、子どもを楽しませてくれたという。「19世紀のニューイングランドの人たちのように暮らしたい」と、食べるものや生活に使う道具など、すべて自然の恵みを活かした手作りにこだわった。絵の仕事場はずっと台所のテーブルで、少しずつ描き続け、42歳で、絵本の最高の賞のカルデコット賞を受賞。46歳の離婚を経て、56歳の時、バーモント州の山奥に18世紀風の農家を建てて、一人で暮らし始める。そこが、「世界一美しい庭」となった。87歳、新作絵本『コーギルのいちばん楽しい日』を出版。これが、彼女の遺作となった⁶¹⁾。

このターシャの生き方について、日本でもNHKの番組で紹介され、大反響を得た⁶²⁾。彼女の生き方の魅力は、何なのであろうか。なぜ、現代の日本人の心を惹きつけたのであろうか。それは、野望や野心とは無縁の、「足下の暮らしを、ごく自然な気持ちで愛することこそ幸福」という価値観が、生き急ぎの現代人に安心感を与えるということであろう。何よりも「手作りの愛」に満ちている。「自分自身の心をかけ、時間をかける」ことを通して、この世に「たった一つ」のものが生まれ出る。しかも、それは時間と愛をかけただけ、「美」と直結し、彼女が作るものは、子どもたちの夢を育む。また、家族とともに楽しむ生活行事を暮らしのリズムにして、一年間が過ぎていく。

それは、誰にでも実現可能な「ふつうの暮らし」である。ただし、彼女は漫然と日々を過ごしていたのではなく、「こういう暮らし方がしたい」という理想の生活のイメージを持ち、その実現に向けて「あきらめない心」「努力し続ける心」も持ち合わせていた。だからこそ、絵本作家としても成功したのだし、国境を越えて人々の心を幸せにする広大な庭園もできた。彼女の手がけた「世界一の美しい庭」は、視覚的に見て美しいものであるが、その美しさを作ったのは「時間」であり、その「時間」を作り出したのは彼女の自然を愛する心・前向きに取り組む心なのであるから、視覚的な自然の草花が咲き乱れる美しさの向こう側に、ターシャの人格美を見て取ることができる。われわれはターシャの残した遺作・遺物に感動を覚えるが、それはその背後にある、彼女の心に惹きつけられるのである。

結局、こうした彼女の暮らし、生き方を貫いている

のは、「自然に寄り添って生き、家族に囲まれながら、自分の持てる技術と心を活かして、喜びを紡ぎ出していく自然体の暮らし」ということに総括できる。その中で特に重要な働きをしているのは、彼女自身それを求めて田舎暮らしに徹したように、「自然に寄り添う」「自然のリズムにすべてをゆだね、その恵みを喜ぶ暮らしを紡ぐ」ということに暮らしの中心価値を置いていることである。自然に寄り添う中で、彼女の人生の時は満たされていく。

春夏秋冬の移り変わりを慈しみ、季節の恵みを喜ぶ暮らしを紡ぐターシャは、「待つ」「時間をかける」ということに価値を置き、しかし、与えられた所与の自然のままに生きるのではなく、与えられた所与の自然、あるいは過去から脈々と受け継がれてきた現在の暮らしに働きかけをしていく。その結果、生活をよりよく営もうとする創造性に満たされていく。暮らしをよりよいものとしようとする意志、それはまさに、生活文化を生み出す基礎である。時間を追いかけることなく、自然の時間のリズムを感じながら「時を待つ」ことの中に、自分の実存を感じ取っていく。この「時の豊かさ」に、現代人は郷愁や憧れを感じる。

自然は、自らも自然的生である人間に、急がないで足下の暮らしの中にある時間を慈しむ本来的な生き方を知らせてくれる。自然を征服するのではなく、自然の恵みを最大限活かすことに悦びを感じ、つつましくも心のこもった生活を家族の時間で満たしていく豊かさ。「自然の恵みを楽しみ、足下の日々の暮らしを心から愛する」という誰にでもできる営みの中にこそ、揺るぎない幸せがあり、「恵みの時」に満ちた真なる暮らしがあることに、あらためて気づきをもたらしてくれるのが、ターシャの生き方であり、それは、愛と情念の「岡本かの子」型でも、無条件の愛の「澤田美喜」型でもない、自然のリズム、宇宙のリズムから恵みを得る、自然原理に即した女性原理からの発想から生み出される暮らしのもう一つの理想の姿といってもよい。

4. 「女性の自然性」の現代的価値

以上、古代の神話世界から「女性の自然性」を検討し、それが具体的に現れ出る暮らし方として、「情念の愛と文芸・芸術に生きる暮らし」「社会奉仕に生き

る暮らし」「自然に根ざして生きる暮らし」の3つの要素を挙げてきた。最後に、ここで考えた「女性の自然性とそのライフスタイル」が実現している価値とは何かを、現代社会の特質の一つとされる「技術連関社会」ということに照らし合わせて検討し、その現代的意義・可能性について指摘したい。

「技術連関社会」とは、哲学者今道友信が現代社会の特質を捉えて表現した言葉である。それは、科学技術が否応なく社会に入り込み、人間をとりまく環境の構成要素となり、人間の行動様式に内在化して人間の意識までも変革していることを指す⁶³⁾。

「技術連関社会」への道は、産業革命を契機に始まった。産業革命の最も大きな功罪は、「自らの身体を動かすことなしに自らの身体を動かしてくれるものを発明した」ということである⁶⁴⁾。そして、今や人間は、否が応でも、自らの身体感覚を超えるスピードに無意識のうちについていかなければならない。その結果、知らず知らずのうちに、機械文明の価値観が、人間の内面や行動様式にまで影響が及んでいるのである⁶⁵⁾。

具体的には、機械や組織が要求する時間に追われて忙しくなり、人間も、反応を行う機械的な動物となり、人間的意識の成立する時間が少なくなった。人間とは、その意識が働くところに「人間らしさ」の本質があるのだから、意識の働く時間が減れば、「人間が人間であること」を保証してくれる時間も空間も縮小する。そこで現代は、「機械化された人面獣の行動体系」を示すことになる。

また、プロセスが軽視され、努力や時間性の意味が消失する結果主義が増大した。たとえば、現代はロープウェイで簡単に山の頂上に行つてよい景色を見ることができる。本来は自分の足で歩いて登るところに、人間的な喜びがたくさんあるのに、結果だけを求めてそれで足りるとする⁶⁶⁾。こうした感覚が、言語は単純明快、プロセスを省き、結論だけ伝達することがよいという社会感覚になった。深みや陰を嫌う、軽金属的な人間性が成立している⁶⁷⁾。その結果、「人間性の喪失」ということが言われるのである。

さらに、間接経験が常態化した。かつては、風や小川のせせらぎに、目に見えない神秘なるものを感じ取っていて、文化の豊かさを生んだ。ところが、現在の機械技術の発達、深海、生物界のミクロの世界、果ては宇宙まで、高度な技術に支えられて、実証的に見

ることができる。私たちは、そこでカメラを通して顕わにされる生物界の姿に目を見張り、これが生物の姿だと間接体験を通して納得する。しかし、そこには「生な体験」はない。人間は、「肉体を持つ精神」であり、本来肉体を通して実感として感じ取られる感覚をもとにその精神活動を行う存在である。その感覚がパーソナルなものとなってしまうと、人間精神が活性化する場面が失われてしまうのである。

こうしたことを背景として、人間の意識が働く時間・空間が縮小し、人間の心の極小化、一人の人が生きる時間の空洞化（非充実）がもたらされている、と今道は指摘する。

こうした社会の中で、ここに「女性の自然性」というとらえ方のもとに述べられた生き方は、どのような価値を持つだろうか。

第一に、彼女たちの生のプロセスの中で、あたかも過ぎゆくように見える「今」という時は、「その瞬間の中に過去から未来を内在する現在完了の継続へと時が質的に充実し、自らの精神が関わる時の連続体へと変質している」⁶⁸⁾といえるのではないか。すなわち、そこに、単なる物理的・自然的時間から、人間的時間の質への転化が認められる。このような実りに満ちた時の積み重ねが、人生の充実、よりよく生きるという生き方をもたらす。その時の実りは、「ただ自分が好きなことをやっている」「趣味であって、あってもなくてもどちらでもいいもの」というのとは異なっている。真剣に目の前の「いのち」に向き合い、本質的な価値に引き寄せられて、自己の「意識」を働かせ、確かな「時」を紡ぎながら人生が歩まれていく。人間精神が最高度に関わる「時の充実」⁶⁹⁾に満ちている。

このことは、上に述べた「技術連関」の社会の中で、「人間性の喪失」が危惧される現代に、その人間性を取り戻すのは、人間的な時間性を取り戻すことにある、という点からみて重要である。自分の「意識」が、よりよきもの、より本質的な人間の生き方に向けて、きちんと働く時を重ねる。そのことの大切さに気づきがあれば、技術連関の忙しい社会の中でも、自分の依って立つところを見失うことはないのではないか。

第二に、彼女たちが生きる時の充実をもたらしているのは、究極のところ「真善美の価値の探求」という

ことである。この「真善美の価値の探求」こそ、まさに「人間らしさ」の根源である。なぜならば、幸福な人生には、健康も名声も富も快楽も必要かもしれないが、それは人間以外の動物にとっても、その平穩無事な生には必要であるのに対し、真善美の価値の探求は、人間の精神ゆえに可能なものだからである。従って、真善美の価値は、人間が人間らしくあることを喜び深める暮らしの創造において、最も根幹をなすべきものである⁷⁰⁾。

彼女たちは、確かに「自分らしく」という人生を表現している。その「自分らしく」が、なぜ人の気持ちを打つか。それは、先にも指摘したように、勝手気ままにとか、独りよがりのわがままを貫き通すというのではなく、より高いもの、至高なもの、より本質的な生、すなわち、真善美の価値の志向性に満ちた生き方に向かおうとする高い精神から光が放たれているからである。「真に相手の立場に立とうと努力して、本当にこの世を美しくしようという心がけが、行為の美しさ、あるいは思いやりの美しさを生んでいく」⁷¹⁾。そこには、行為そのものの美がある。「美とは、感覚的なきれいさではなく、心によって生じてくる輝き、すなわち精神の所産」⁷²⁾なのである。彼女たちの生き方の本質は何かと問えば、人間として生きるにあたって本来指向されるべき「精神美・人格美に満ちた時を紡ぐこと」を可能にしている暮らしなのである。

このことは、「現代のように、神の創ったものよりも人の創ったものの方が優位に置かれる時代、計測が眼目となる社会では、好意はあっても誤りうる人間より、感情なく敏速に正解を示す計算機の方が有用になる」⁷³⁾という中で、人間が本来存在の原初から持っている「崇高なものへの憧れ」から生まれる美意識に根ざした「人間である」ことを実現する生き方を可能にするという意味において、重要な価値を持つ。

このようにみえてくると、技術連関で人間性の喪失が言われる中で、人間の精神を働かせる「生」に満ちた時間、「時の充実」に働く「女性の自然性」の力は大きいといえるのではないだろうか。

5. 結語

バハオーフェンは、歴史は、野蛮な粗野な状態から女性原理を主体とする文明の開化の時代へ、そして、

父性原理を主体とする人為的な法律を介しての高度な文明時代へと発展した、という歴史図式を示した。その父権制原理の社会にひずみが出てきたときに、今度は両者が止揚して、父権型の組織社会の中に、「高次の精神的水準」であるところの愛と平等の原理が入り込んでくる、それが次なる理想の社会である、と予知した。

現代は、まさに、その段階にあると考えてよいのではないか。第二節において指摘したように、理性優位の父権制社会のもたらしてきた負の部分のひずみは大きく、その平和的解決に働くのは、母権制原理と父権制原理が融合して、愛と平等を価値とする社会を実現していくことに依る。父権制優位社会の中で、いかに母権制的原理を働かせていくかということが、大切になってくる。そして、本稿において、母権制的原理、すなわち「女性の自然性」を働かせることの意義が確認された。問題は、それをいかに精神性高く求めているかということではないか。

本稿の考察を通しての結論として、「仕事と生活の調和」が求められていくこれからの時代に、男性原理で作られてきた組織社会の一員となってその歯車で生きる生き方ではなく、生の本質に根ざした「女性の自然性」から発想する生き方を指向し、その中で自分自身の意識が関わる時間を豊かにしていくという暮らし方の価値を指摘したい。来るワークライフバランス社会は、そのような生き方を可能にする社会でありたい。男性の女性並み化（男性が家事・育児に向かうこと）、女性の男性並み化（女性が家庭を出て外で働くこと）といった二分法的とらえ方を超えて、「人間である」という営みの根底にある「真善美の価値」に根ざした暮らし方への志向である。そこに働く女性の力は大きい。

付言すれば、そのためには、「美しいものを美しいと思う心」をいかに育むかということが、人生の教養として、大切なことになるのではないだろうか。その意味で、美を呼び起こすものとしての自然美に触れていくことの価値、あるいは芸術に触れていくことの価値も指摘できよう。自然美は普遍的な美の価値へと開かれる可能性に満ちている。また、芸術美は、人間に時間の価値を回復させ、事物が本来持つ霊性の美の力を呼び起こす⁷⁴⁾。従って、日頃の暮らしの中で、より美しい芸術、より美しい言葉に触れていく時間を大

切にすることが、その向こうにある普遍的価値としての美へのまなざしを育み、理念（イデア）としての美を憧憬する心をもたらすのである。

このことから、古代の母なるものの力を内在化した古典の言葉を、教養として豊かに味わう営みも大切なのではないか。試みに万葉集をひもといてみれば、その中には、生活の安定、豊穡を願い、死者を悼み魂の再生を祈る「女性の自然性」に基づく心が、自然の風物に託されて歌われる。日本人の細やかなもののあはれの感情をそこに見いだすことができる。それは、日本人の誇るべき文化遺産であり、われわれが本質に根ざして生きる精神のよりどころとなると同時に、豊穡を祈り、隣人の無事を祈る心は万国共通のものであり、民族の言葉から普遍的価値の精神美へと開かれる。

ただ表面的、感覚的な美しさのある生活ではなく、内面的な力となる、想像力・創造力の源泉となる美への憧れをいかに育むか。そのためには、古典の価値に動機づけ、芸術美・自然美に内在する価値に動機づけしていく。そのような広い総合的な生活力を養う営みもまた、新たな生活文化の創造に向けて、大切になるのではないだろうか。

【註および引用文献】

- 1) なぜ「神話」なのかについては、次の立場に準拠する。「神話のうちにこそ起源が潜み、神話だけが起源を解き明かしよう。そして、起源こそはその後の経過を規定し、その進む方向を永遠に決定づけるものだ」J.J. バハオーフェン、吉原達也訳 (2002)：母権制序説、p.159、筑摩書房
- 2) 松田義幸・江藤裕之 (2007)：古代母権制社会研究の今日的視点、実践女子大学生生活科学部紀要第44号、pp.73-100.
- 3) Johann J.Bachofen (1861) *Das Mutterrecht*. Stuttgart: Verlag von Kraiss & Hoffmann. 訳書として、J.J. バハオーフェン、吉原達也・平田公夫訳 (1992/1993)：母権制、白水社、および、J.J. バハオーフェン、岡道夫・川上倫逸監訳 (1993)：母権論、みすず書房、および、J.J. バハオーフェン、吉原達也訳 (2002)：母権制序説、筑摩書房
- 4) エーリッヒ・フロム、滝沢海南子・渡辺憲正訳 (1997)：愛と性と母権制、p.141、新評論
- 5) 同上書、p.142
- 6) バハオーフェン (吉原訳)：前掲書、p.166
- 7) フロム：前掲書、p.143
- 8) バハオーフェン (吉原訳)：前掲書、p.166
- 9) フロム：前掲書、p.143
- 10) バハオーフェン (吉原訳)：前掲書、p.166
- 11) フロム：前掲書、p.141
- 12) 同上書、p.142
- 13) 同上書、p.142
- 14) 同上書、p.150
- 15) バハオーフェン (吉原訳)：前掲書、p.178
- 16) 同上書、p.179
- 17) 同上書、p.179
- 18) 同上書、p.189
- 19) 松田・江藤：前掲論文、p.86
- 20) バハオーフェン (吉原訳)：前掲書、p.182
- 21) 同上書、p.180
- 22) バーバラ・ウオーカー、山下圭一郎他訳 (1988)：神話・伝承事典、pp.443-446、大修館書店
- 23) 松田・江藤：前掲論文、p.84
- 24) バハオーフェン (吉原訳)：前掲書、p.188
- 25) フロム：前掲書、p.247
- 26) 伊井春樹編 (2008)：一千年目の源氏物語、pp.19-20、思文閣出版
- 27) 同上書、p.22
- 28) 折口信夫：折口信夫全集第二巻 (1972)、p.294、中央公論社
- 29) 折口信夫：折口信夫全集第八巻 (1972)、p.16、中央公論社 および 折口信夫：折口信夫全集第二巻 (1972)、p.6、中央公論社
- 30) 「ほんとうに、祖々を怖じさせた常夜は、比良坂の下に底知れぬよみの国であり、ねのかたすの国であった。いざなぎの命の据えられた千引きの岩も、底の国への道の中絶えにすることができなかった」折口信夫：折口信夫全集第二巻 (1972)、p.14
- 31) 折口信夫：折口信夫全集 (新編) 第十八巻 (1996)、pp.432-433、中央公論社
- 32) 「多くの女性に遭ひ、多くの女性の愛を抱擁し、多くの女性を幸福にし、広い家庭を構へ、多くの児孫を持つと言ふ事が、古代の人としては、何の欠陥もない筈であった」折口信夫：折口信夫全集、第十四巻、p.220
- 33) 西村亨編 (1998)：折口信夫事典 (増補版)、pp.263-264、大修館書店
- 34) 典型的な事例として、「八千矛の神の歌物語」(大国主とすせり姫)
- 35) 山折哲雄編 (1990)：日本における女性、p.62、名著刊行会
- 36) 岡野弘彦他 (2007)：国境を越えた源氏物語、p.50、PHP
- 37) 西村編：前掲書、p.235
- 38) 同上書、p.237
- 39) 同上書、p.238
- 40) 同上書、p.239
- 41) 同上書、pp.239-40
- 42) 岡野他：前掲書、p.53
- 43) 福田清人・平野睦子 (1989)：岡本かの子、清水書院
- 44) 瀬戸内晴美 (2005)：かの子繚乱、p.379、講談社
- 45) 福田・平野：前掲書、p.65
- 46) 同上書、p.61
- 47) 岡本太郎 (1995)：一平かの子、p.104、チクマ秀版社
- 48) 同上書、p.13
- 49) 同上書、p.93
- 50) 同上書、p.124
- 51) 同上書、p.130
- 52) 同上書、p.135
- 53) 同上書、p.119
- 54) 同上書、p.141
- 55) 同上書、p.164
- 56) 澤田美喜 (2001)：黒い肌と白い心ーサンダース・ホームへの道一、p.47、日本図書センター
- 57) 同上書、p.135
- 58) 同上書、p.138
- 59) 同上書、p.141
- 60) 同上書、p.280
- 61) ベサニー・テューダ、食野雅子訳 (1999)：小径の向こうの家ー母ターシャ・テューダの生き方ー、メディアファクトリー
- 62) 2001年にターシャの暮らしを紹介した番組が紹介されて大反響を得、翌年、第二作が制作され放映された。以後毎年、クリスマスの時期に再放送されている。
- 63) 今道友信 (1990)：エコエティカ、講談社
- 64) 今道友信 (2006)：美の存立と生成、pp.82、ピナケス出版
- 65) 同上書、pp.83-84
- 66) 同上書、pp.323-324
- 67) 同上書、p.84
- 68) 同上書、pp.138-140
- 69) 同上書、p.330
- 70) 今道友信 (1973)：美について、p.12、講談社
- 71) 同上書、pp.232-233
- 72) 同上書、p.211
- 73) 今道：前掲書 (2006)、p.148
- 74) 同上書、p.149